

Landmark Android

尾藤 三

第一話「ロボットと探偵」

「よう相棒、どうだね、そちらの進捗は」

俺が尋ねると、主の佐々木道嗣は、若干面倒くさそうに答える。

「どうにも収穫はないね。ところで、その言葉遣いはどうにかならないか」

「やっぱりおかしいかい？」

「ああ、うまく言えないが、不自然で気持ち悪いよ」

「仕方ないだろう、相棒。探偵同士の会話を想定したアルゴリズムなんて、まだ的確に開発されていないんだ。しかも相棒は有償のアップデートオプションを申し込んでいないだろう？ それでは相棒の気持ち悪さが解消されるまで、相当の日数を要するだろうぜ」

「うん、仮に、俺の貧乏とケチ臭さを認めるとしてもな、お前、人間としての言葉遣いがそもそもおかしいじゃないか」

「そうかい？」

「ああ、よくそれで刑事の仕事が勤まったよな」

「その点においては何分記憶を消去されているので、再評価はできないのだが、申し訳ない。謝る」

「...いいんだ。役には立ってる」

俺を買った佐々木という一匹狼の探偵はいい奴だ。人間にとって、会話がしっくりいかないということは、それ相応のストレスのはずなのに、それ一つで俺というメカを全部を評価することはしない。なんとかして佐々木が売り手に払った金以上の働きをしてやりたいのだが、それがなかなか難しい。

俺達は、佐々木の自宅兼事務所の作業部屋で、依頼人が住んでいる町内の地域データを洗っていた。役所からこのデータベースにアクセスを許可された時間は長くはない。もし制限時間内に、依頼人の探し物の手がかりを発見できなければ、佐々木は役所に追加料金を支払うことになってしまう。それは、ただでさえ利益率の厳しい依頼人への見積もりから、さらに儲けが減ることを意味している。

「コーヒー淹れてくる」と言い残し、佐々木は席を立った。机の上のモニタには、町内を仮想的に立体描写し、まるで現実にそこを歩くかのように動き回れるアプリケーションが表示可能領域一杯に映し出されていた。俺はというと、依頼人のペットの猫が最後に目撃されたという地点に直接立っていた。メカ探偵である俺は、筐体端末に直接手首に収納されているコネクタを突き刺すだけでそれが可能になるが、生身の人間が同じようなことをしたければ、スキーのゴーグルのような形の専用メガネをかければいけない。臨場感、という意味ではそうした方がより望ましい結果を得られるのかもしれないが、残念ながらその専用メガネは、普通のモニタよりもはるかに値が張ってしまう。

助手も雇えない一匹狼の探偵にはこなせる依頼にも限りがあり、また探偵としては平凡な能力で、特別な筋にコネも持たないのだから、そんな探偵の収入なんてたかが知れてるんだろう。最初は、よく俺みたいな警察タイプのロボットを買えたもんだと不思議に思ったものだ。そこそこの立地条件の小奇麗なワンルームマンションを買えるくらいの金が必要だ。どういう風の吹き回しで、貧乏探偵が俺のような高価なロボットを買うに至ったのか、それは不必要な情報として判断されているのか、俺には知らされてはいなかったのだが、とにかく主が払った金以上の結果を見せてやらないと気の毒だな、と、そう思っていた。

いくら動物搜索の基本が足を使うことと言っても、効率よくやれることは効率よくやりたい。ということで、まず先立って依頼人から回収したターゲットの猫の生体データを区役所にあるデータベースと照らし合わせて、できる限りの足取りを追うことにした。街中に設置されている市街地管理用の複合型高性能センサー、通称「マルチセンサー」は、カメラからの画像データだけでなく、その時の気温、大気状態、存在していた物質とその動きまで、可能な限り検知してデータベース化する。

しかし、そのデータベースへのアクセスは、無論政府によって厳しく管理されている。佐々木は届出を出している正規の探偵だったので、一般市民よりは多少上位のアクセス権限が付与されているが、アクセスしている時間とデータ量に応じて規定の使用料を徴収されることになっている。

たかだかコーヒーを淹れにいった割にはなかなか戻らない佐々木のはあまり考えず、俺は猫の足取りを追ってみた。なにせ相手は猫なので、道なき道を、時には壁を垂直に駆け上り、民家の屋根から屋根を伝い、最後の目撃現場から数キロ離れた地点まで移動していた。仮想空間なので、自分の体や重力といった制約は全くないが、これが現実の空間で同じ足取りを追うとなると、かなり骨の折れる行程だっただろう。

足跡が途切れた地点にあったものは、建てられて何十年も経っているであろう古ぼけた倉庫だった。

さっそく依頼人の猫の痕跡が途絶えた倉庫に向かうことになった。自動車の運転は、佐々木が自分でやっている。俺でも運転くらいできるが、どうもロボットの運転は信用できないらしい。

「おいロボット、所有者はわかったか？」

「まだ多少の猶予を望む」

俺は佐々木の指示で、ネットワークに接続して不動産の登記簿を調べていた。

「案外時間かかるな」

「...なあ相棒、問題発生」

「なんだ。アクセス用のライセンスは問題ないだろ？」

「それは問題なく接続成功だが、ここでも利用料が必要な仕様だ」

佐々木は小さくため息をつく。

「仕方ない。こちらの身の安全のためだ。持ち主がわからない倉庫に忍び込むなんて無謀なことをしたくないからな」

「了解」

この先の情報の閲覧には利用料金が徴収されることを二度も確認された上で、登記簿にアクセスする。

「所有者は海静女学院という女子大付属の高校だ」

俺からの返事を聞いて、佐々木は目を細める。

「なんか予想外」

「高校が倉庫を所有するのが不可解だろうか？」

「倉庫くらい持っててもいいんだらうけど、この違和感は何だろうな」

「話の根拠が合理的でない」

「まあな。ただの直感だからな」

「ただの、直感」

今度は俺が少しの間、沈黙する。

「どうかしたか？」

佐々木が運転しながら、ちらりと俺を見る。

「複雑な言葉だ。俺は、ただの直感、という言葉処理し辛い」

車は念のため、目標の倉庫から目立たない位置に停めた。盗難防止アラームをセットし、もしこの車に不審なことをされたら、すぐに俺に信号が届くようになっている。

街の中心部からは随分離れ、周囲には人気がない。自然が大分残されており、もう少し車を走らせれば、完全に峠道になるだろう。

五分ほど歩き、倉庫の前に到着する。普段は全く人がいないのだろうか。周囲に管理人室のようなものも見当たらない。

俺達二人は正面の巨大なシャッターの前に立った。ふと、佐々木が思い出したように言う。

「あ、お前、電源大丈夫？」

俺はバッテリー残量を確認してから答える。

「心配無用。先程車のソケットを利用して充電したのであった」

「ソツがないね。いざって時、バッテリー切れじゃ困るからな」

「相棒。俺達は所在不明の猫を捜索するだけという認識で相違ないか？」

「そうだよ。でも不安にならないか、こういう人気のない倉庫って」

「解釈不能である」

佐々木は壁に耳を当てる。

「まあ、こんな中で中に人がいるかわかったら苦労ないね」

次に佐々木はシャッターの横にある小さなドアが施錠されているか確認する。...ドアノブは回らない。

「さあ、ロボット、出番だ。開けてくれ」

「無理だ」

俺は即答する。

「汎用入力端子を備えた電子ロックであれハッキングを試行可能だが、これは明らかに前世代的な、鉄が低コストと評価されていた頃に普及していた錠前だ」

「その腕が変形してピッキングするんだろ？」

「相棒、ロボットを何だと考えている」

「そうか、それは残念だ」

佐々木は、どうにかして中の様子を窺い知るための方法を思案していた。高さ五メートルほど頭上に窓があり、それをじっと見つめていた。しかし、いくら俺が佐々木を肩車したところで、その窓から中を見るのは不可能だ。

「相棒。室内の熱源を調べてみようか？ 人が存在するか否かくらいの判断材料は採集できる」

「なんだよ、そんなことができるのか。便利じゃないか」

「高評価に感謝」

俺は倉庫内部の熱源を調べた。

...人がいる。しかも複数。ターゲットの猫は発見できない。

...そして、不可解なことに、あちら側からも同様のセンサーを使って俺達二人を調べている反応を検知した...

「このドアを開けてください。私はこのエリアを担当しているロボット刑事です」
俺は拡声器モードで中の人物達に話しかける。立てこもり犯との交渉用に実装されている物だ。倉庫のコンクリートの分厚い壁を通して十分に聞こえるだろう。

中の人間は四人。体格から全員が女性と思われる。俺が声をかける前までは各々適当に距離を取って椅子のような物に座っていたが、声が聞こえた直後一人が立ち上がり、他の三人がその一人を囲むように移動した。

そして室内の熱源センサーは俺に焦点を当て、より詳細に周辺の熱源を調べている。

俺はもう一言かけることにした。

「付近で聞き込み捜査を実施中であり、あなた方にも協力要請しております」

最初に立ち上がった一人が大きく頷き、ドアの方に向かってきた。佐々木からの指示なので、念のため護身用の危険物を所持していないかスキャンする。対痴漢対策として出回っている動画撮影機能が内臓された小型スタンガン所持しているようだ。許容の範囲と判断した。一方先ほどから俺達をモニターしているセンサーは、俺の周辺にスキャン範囲を広げている。佐々木を探しているのか。この時点で、建物内部に設置されているセンサー機器は、かなり高い確率で人工知能を有していると予想できた。

錠前の鍵が開けられると、一人の女学生が顔を見せた。事前にこの倉庫の所有者が海静女学院ということを知らなければ、多少は驚いたかもしれない。所有者を事前に調べた理由はどうであれ、佐々木の判断は良い結果を一つもたらした。

「お取り込み中に失礼しました。短時間で用件を決着すべく、努力致しますのでご容赦下さい」
「うわ...、ロボット刑事って初めて」「本当にあんなしゃべり方なんだね」「デパートの案内ロボットのほうがまだマシだね」と、後ろに控えている三人の少女達に矢継ぎ早に評価をされてしまう。

それにしても酷い扱いだ。例えば、デパートの案内ロボに突拍子なく「隣の囲いに塀ができたってね」と話しかけてみる。「恐れ入りますが、その内容のご案内は出来かねます」と答えるに決まっている。奴らは想定外の言葉にはそう対処すればいいだけだ。ロボット刑事やロボット探偵は、そんな逃げ口上を与えられていないから難しいというのに。

「ちょっと黙ってて」と、目の前の少女が後ろの少女達に一喝する。なるほど、最近の子供達には珍しい、リーダーを頂点とするピラミッド型の人間関係のようだ。

「一体、どんなご用件ですか？」とリーダーの少女は答えた。表情は一見柔らかく微笑んではいるが、頬肉の緊張が不自然だ。この顔の骨格の持ち主が、こういった表情をする場合、若干の敵意を持っていることが多い。そういう類のデータは、警察タイプのロボットは、我が国の警察が蓄積させたデータを丸ごと持ち合わせている。なるほど、どんなことをお楽しみだったかはわからないが、俺はそれを中断させたことで嫌われてしまったのかもしれない。それとも、彼女達は第三者が尋ねてきたことだけで驚くべきことであり、それが過度の警戒心を煽ったか。...よし、ちょっとゆさぶってみよう。

「三国園子さん、ですね」

と、名乗ってもいない相手のフルネームを告げてみる。実は所有者が海静女学院であることがわかった段階で、在校生の顔と名前と簡単なプロフィールといった情報をダウンロードしておいた。そして、三国園子がここにいるということは、また別の無視できない事実ではあるのだが、今それを考えても仕方がないので、そのことは保留しておく。

三国園子は、今度は明確に不快感を示した。と言っても、笑顔は保たれたままだが、眉と眉の間に力が籠ったことが心の動きを示している。そして、後ろの三人は、リーダーの名前が割れていることに、もっと露骨に驚く反応を見せた。そんな仲間達よりもいち早く立ち直り、リーダーは答える。

「はい。私は三国と申します」

「三国さんにお聞きします。このご近所で、近日私が担当している事件の重要参考人が目撃された情報を得ました。順次これを見ていただいてよろしいでしょうか」

俺は、事前に佐々木から、相手に敵意があった場合にすよう指示された質問を、その通りぶつけてみた。そして俺は、右太ももの収納ポケットから、カード型の携帯通信端末「ポタフォ」を取り出し、佐々木の顔写真を表示させてから三国園子に見せた。

「ご友人の皆々様方も閲覧下さい」

そう俺に促されて、やや遠巻きだった少女達も近づいてくる。四人が佐々木の顔を見ている間、それぞれがどのような反応をするか注意深く観察する。誰も驚いたり、何かに気づく素振りは見せない。演技でもないようだ。佐々木の顔を見るのは本当に初めてのようだ。ということは、この倉庫内に存在している人工知能付きセンサーから、まだそう多くの情報は得ていないと判断してもいいだろうか。

「記憶ありませんか？」

全員が言葉は発さずに、首を横に振る。

「この辺りは人を隠匿できる建造物はそう多くないのです。何か情報が得られると予想しておりました」

「あの」と、四人の中で一番緊張している少女が俺に尋ねる。この少女は相沢真理香という名前だ。

「重要参考人って、犯人ってということですか？」

「いえ、そう断定はされておられません。しかしながらその可能性はあります」

「ちょっと、それ本当ですか」

「嘘をついてもこの場にいる全員の不利益にしかありません」

俺に質問をした相沢真理香は、仲間に何かを訴える目配せをする。

「皆々様方は、この状況に対する防衛手段をお持ちですか？」

「すみません、おっしゃってる意味がちょっと...」

三国園子が質問してきたので、俺は言い直す。

「謝罪申し上げます。このような閑散とした場所に、女学生だけで滞在するのは相応の危険が伴うかと存じました」

「女学生」と少女の一人が言い、やがて全員がクスクスと笑い始めた。

「女学生はツボだわ」

「数学の、なんだっけあのじいさん」

「渋川先生でしょ」

「そうそう、あいつが前に言ってたわ」

ウッフ、アハハと笑いは収まらない。なんだろう、俺の言葉遣いが面白いのはわかるが、教科担任の名前すら覚えていないのは指摘しておいた方がいいのだろうか。いやいや、そんなことをしても仕方がないので、一通り彼女達が満足するまで待つことにした。

「差し支えなければお答え頂きたいが、ここにはどんな目的で？」

「学校や親には秘密にしていただけますか？」

やはり三国園子が代表して答えた。

「事件性が介在しなければ、学校やご両親への報告は必要ないと判断しますが」

三国園子は「女学生」がツボに入った時とはまた別の笑顔を作った。

「ここは部室みたいなものなんです」

「なるほど。あなた達はサークル活動を行っているのですか？」

そんな情報はデータベースには登録されていなかったが、正式に学校側に部として公認されていない同好会レベルのものであれば、登録されていない可能性はあった。

「いいえ、そんな大したことではないです。ただ集まっておしゃべりしたりするだけです」

俺にはどうも理解できなかった

「しかし、この地点は学校からも随分離れておりますし、わざわざそれだけのために」と、そこまで言いかけたところで、佐々木から指示が入る。佐々木の声は俺にしか聞こえてない。彼はここから少し離れた場所から、俺の目と耳から入った情報を、彼のポタフォを使い共有していた。

「そこを追求しても仕方がない。無駄に嫌われる必要もないから、やめておこう」

了解、と佐々木が確認しているポタフォに直接音声を送る。そして、佐々木がこう続けろと指示してきた通りの言葉を繋ぐ。

「...でも、全寮制の厳しそうな高校ですものね。こんなところでも来ないと息抜きもできませんか」

「そうなんですよ。ほんと色々大変で」と少女の一人が答える。大分警戒心が薄れてきたようだ。

「あの、質問してもいいですか？」

相沢真理香だ。好奇心も強いタイプだろうか。

「お答えできることであれば」

「そのお顔、なんですけど、むき出しなんです」

なるほど、今時ロボットなど珍しくもなんともないだろうが、そのほとんどは人間の顔に近づけるために、人口の皮膚を被せていた。しかし俺は佐々木の意向で人口皮膚の類は一切被せられていない。メカの部分が剥き出しになっており、機械の骸骨そのままだった。「あれは逆に気持ちが悪い。出来損ないのマスク被っているみたいで、隠そうとしているものが実際以上に気持ちの悪いものだ」と主張している気すらしてくる」と、佐々木は言っていたが、単に人工皮膚にかかる金もったいだけかもしれない。ちなみに、機械の骨格には透明で薄く丈夫な膜が張られていて、それが絶縁体とパーツ保護の役割を負っている。それさえきちんと機能していれば、人口皮膚などなくても活動に支障はない。しかし全身ピカピカ輝いた機械の骸骨がその辺りを闊歩する様は、それなりに不気味かもしれなかったが、少なくとも佐々木はそんな他人の視線はどこ吹く風だった。

そう考えると、先ほど三国園子ドアが開いた時には、少なからずショックだったかもしれない。三国園子は外見以上に肝が座っているというか、厚顔なのかもしれない。

「見逃してもらえますか？」と三国園子が確認をしてくる。こんな時は、もう少し上目遣いで可愛らしくお願いすればいいものを、変なところは堂々としている。

「許容します。しかし立ち入りが禁ぜられている以上、不法侵入です。そこはよくご理解頂いた方が賢明です」

「はい」

「それと、先ほど閲覧して頂いた参考人を目撃されましたら、私めに連絡を下さい。連絡先はあなた方の携帯端末に送信を致します」

俺がそう言うと、三国園子と仲間達は奥のテーブルに置きっ放しになっていた携帯端末を見に行く。三国園子は端末のディスプレイに表示されたであろうアドレスを確認すると頷いた。

「確かに受け取りました」

ちなみに送信したアドレスは、俺がいくつか持っている外部アクセス用の本物のアドレスだった。

俺は彼女達に挨拶をして倉庫を後にした。彼女達から見えなくなる位置まで来てから佐々木に合図を送り、まもなく佐々木も合流した。

「結局、猫は見つからなかったか」

佐々木は無表情に呟く。

「残念至極」

「彼女達がいない時間を見計らって、あの中を徹底的に探してみよう」

「クライアントへの報告はどうするのだろうか？」

なかなか佐々木が言い出さないなので、俺からこの話題を出してみた。

実は、彼女達がああ倉庫で何をしていたのかなんてことよりも、ずっと興味を引く事実があった。

「そうだなあ。ありのままを報告すべきなんだろうが、気の毒な気もするし…。それよりも気になることがあるんだ」

「それよりも気になること」とは、なんだろう。佐々木の考えていることを推察してみたがわからない。

「あのさ、彼女達の足はなんだ？」

何かの慣用表現だろうか。意味がわからないので、彼の言葉を繰り返す。

「足はなんだ？ 足はなんだ？」

佐々木は頭をぼりぼり搔いて言い直す。

「ああ、ここまでの交通手段だよ。街の中心部から随分離れてる。車で来ないと無理だろ？ …どこかに俺達以外の車があるはずなんだけど…。気になるから探してみようかな」

佐々木はそう言って、周囲を見回す。猫探しに直接関係してくるとは思わなかったから、俺は反対をしようと思ったが、そんなことよりも優先しなければいけない事態を検知した。

「ちょっと待て、相棒」

佐々木は彼女達の車を探すのをやめて、こちらに向き直る。

「我々の自動車に何者かが不正にアクセスしている。盗難防止センサーが作動している」

俺達が警戒しながら車に近付いた時には、既に何者もそこにはいなかった。俺は佐々木の指示で車に何か悪戯をされていないか入念にチェックしたが、特にその形跡はなかった。確かなのは、何者かがこの車の記憶メモリ領域に物理的にアクセスしようとしたことだけだ。おそらく細かいケーブル上の読み取り装置を車に進入させようとしたところで、盗難センサーが働き、同時にこの場を立ち去ったのだろう。佐々木が俺に意見を求める。

「また役所のデータベースにアクセスしようか。ひょっとしたらデータの再構築がされて、仮想空間が更新されているかもしれない。今の悪戯の犯人も、ターゲットの猫の足取りも、もっとはっきりするかもしれないし」

街の各所に設置されているマルチセンサーから、役所の中央集約端末に送られてくる情報は非常に膨大になため処理に時間がかかる。場合によっては、時間を置いて仮想空間にアクセスすることで、以前得られなかった情報が更新されている場合がある。俺は主に否定的な回答を示す。

「相棒、猫はともかく、この車に不正アクセスした正体の情報は期待できかねる」

「なんで？」

「妨害用の電波が発せられた形跡がある。微弱ではあるが確かに検知している」

佐々木は顎を触りながら肩を落とす。

「...そうか。結構きつそうなジャミングか？」

「手に負えない範疇ではない。役所に正式に解析依頼の申請を提出すれば、何とか再構築の上で視覚的データを復元できそうな見込みではある」

「だが、それじゃすぐには無理だな」

「平均的には二ヶ月後くらいか」

「それじゃあ、な。まあいいや、盗られた物もないならこの件は保留で」

佐々木は運転席側のドアに手のひらを当て、ロックを解除した。特に問題なくロックは開錠され、運転席に乗り込む。俺も助手席側に回りこみ、車に乗り込む。

「さてと、クライアントに今日の成果を報告しに行くか」

俺は佐々木にもう一度聞いてみる。

「相棒、クライアントに娘さんがあの場に滞在していたことを報告するのだろうか？」

佐々木は何も答えなかった。

三国園子の件をどうするか、まだ決めかねていたのかもしれない。

三国加寿子は、佐々木からの報告を黙って聞いていた。一方、夫の三国重雄は佐々木の話を通してでも口を開いた。助手として同席している俺は、もちろん沈黙を守っていた。

三国重雄とは初めて顔を合わせた。ここまで、依頼の電話から打ち合わせまで、三国加寿子と話していた。三国加寿子は初対面の時から落ち着いた対応だったが、反対に三国重雄はよく喋る男だった。そしてその発言には、常に猜疑心が含まれていて棘がある。

しかし、相手につけいって交渉をするならば、軽率な発言の多い三国重雄の方が、より有利に運べるかもしれない。佐々木は頭は切れる男だが、三国加寿子のように黙って相手の言葉を聞くタイプとは案外相性が悪いようで、調査料の交渉では勝手に自滅していった。佐々木は、三国加寿子から前向きな反応を引き出そうと、安易に値引き作戦を取っていったのだ。見ていて愉快的やりとりだったのだが、もちろんそんなことを佐々木には言えない。とても恐ろしくて、儲けを時給換算できない金額でこの依頼を受けることが決まった帰り道、「なんだかあのおばさんにしてやられたな」と呟く佐々木に、「良心的な対応だったと思うよ」とフォローするのが精一杯だった。

「ご苦労様でした」

と、佐々木の報告を聞き終えた三国加寿子はソファから腰を上げた。

「お茶のおかわりをお持ちしますわね」との申し出に「いえお構いなく」と社交辞令を忘れないう佐々木。

三国夫妻の自宅は、さすがに娘をそこそこ名の通った学校に通わせるだけあって、大きな居間とグレードの高い電化製品が配置された、金のかかった家だった。

出されたお茶も、香りを分析するに、スーパーマーケットでは手に入らない高級な茶葉を使用した物だった。もっと交渉を頑張れば、こんなカツカツな予算で捜査する必要もないのに、と俺は思ったが、規格外ではない中流から上流に片足を突っ込んでいる現実味のある金持ちだからこそ、金の使い方はしっかりしているのかもしれない。

「もう一つ、ご報告しなければいけないことがございます」

佐々木は、ターゲットの猫が最後に確認できた倉庫に、彼らの娘の三国園子が友人達と共に居たことを報告した。

「なんだって、娘がそんなところに？」

三国重雄はことさら大きい声を出した。この男、よく喋る上に声も大きい。

「はい。理由はわかりませんでした。授業をさぼっている時間帯ではありませんでした。おそらく、放課後の遊び場所としてあの倉庫を使っているんでしょう。ただ気になるのは…」

「放課後だろうと、何だろうと、それは放っておけないな。あの辺はまったく人気がないだろう？」

「そうですね。それで気になるのは…」

佐々木の言葉を待つわけでもなく、三国重雄は不機嫌そうに視線を逸らす。何事か既に考え始めている様子だ。

「何が気になるんですの？」

奥から、三国加寿子が新しいカップを持って来た。佐々木は三国加寿子に向き直り説明を続けた。

「彼女達の移動手段が不明でした。じっくりと探したわけではないですが、乗り物らしい乗り物がなかったんです。バスも通ってない所なので、学校からは、自動車か、あるいはバイクでもないとあのような場所に行けるはずないかと。歩けば、下手すると二時間はかかる可能性が」

三国重雄が間も取らずに言った。

「だが、娘は免許など持ってないぞ」

「そうですね。他の三人も同様です。それは調べました」

そうなのだ。佐々木は三国家へ向かう道すがら、それを俺に調べさせた。

「じゃあ、どうやって、そんな場所に行ったというんだ」

だから佐々木はこのことを気になることと報告しているんだ。興奮している夫とは対照的に物静かに、しかし今日一番の不機嫌さな感情を込めて三国加寿子が言った。

「他の、そう、校外の友達がそこにいたのかもしれませんがね。あの「大惨事」以来、子供に免許を取らせる親は増えましたから」

「そうですね」とだけ佐々木は返すが、三国園子と、その仲間以外あの場にいなかったのは、俺がよく調べている。

「そうですね、ではないよ。そういう悪い交友関係から遠ざけるために、全寮制の学校に入れたんじゃないか」

必要最小限の相槌であっても、やはり佐々木は三国重雄に絡まれる。三国加寿子がうんざりした様子で夫に言う。

「だから言ったでしょう。そんなこと意味がないって。普通の高校に入れようが、そうでない名門校に入れようが、そこに大した意味はありません。結局、子供は子供の世界を作っていくのですから」

「何も今そんな言い方をする必要はないだろう！」

三国重雄が怒鳴る。「そんなこと」を持ち出したのは彼の方なのだが、もちろん俺は黙っていた。

「わかりました。話を戻しましょう」と三国加寿子が、もう夫には目も合わせずに言った。

「ゴンゾを発見するために、明日はその倉庫を再びお調べになるということですね」

ゴンゾとはターゲットの猫の名前だ。

「はい。今日は娘さん達がいらっしやっただので、まともな調査はできていません」

佐々木は俺を一瞥する間を取ってから続ける。

「あしたはこいつを使って、細かいデータを集めるところから始めます」

三国加寿子は目を瞑り、一拍考える。

「明日も同じ時間に報告にいらして下さい。お願いします」

そうして彼女は深々と頭を下げる。三国重雄も形だけ頭を下げる。そんな二人に、佐々木は確認する。

「あの、娘さんのことは如何致しますか？」

三国加寿子が即答した。

「園子のことはこの件とは関係ありませんから」

佐々木は大きく頷いてみせる。

「わかりました。実は、園子さんと今日約束をしてしまいました。今日倉庫で会ったことは学校にも親にも報告しない、と」

三国加寿子が初めて笑顔になる。

「あら、そうですの。娘も可愛いところがあるのね」

「かなりしっかりしたお嬢様ですけどね」

佐々木も少しおどけてみせる。三国重雄がまた何か言いたそうだったが、佐々木と妻の完成された雰囲気は何も言えなかったようだ。

「一応、伝えましたから」

そう言ってから、佐々木は俺に目で合図をした。俺が頷くと同時に三国加寿子が「お疲れ様でした」と今日の報告会のお開きを宣言する。そして、三国夫妻に見送られながら、俺達は三国家を後にした。

車の中で俺も佐々木に報告することがあった。

「相棒、三国園子とあの夫婦に血縁関係はない」

「そうか。やっぱり「待ち人世帯」なのかい？」

「役所に提出された養子縁組に関する書類ではそうなっている」

佐々木は、ほんの少し沈黙した後「ちょっと寄り道してもいいかい？」と、聞いてきた。俺に主の提案を断る権限なんてない。

「相棒の身体的疲労を考慮すると推奨できないが、もちろん、そうしたいなら遠慮なくそうするといい」

佐々木は車を走らせ、探偵事務所兼慎ましい自宅をやり過ごし、もう三キロほど先にある高台まで向かった。ガードレールがなければ近付くことにも抵抗を覚えそうな崖っぺりに車を停めた。佐々木は車を降り、途中買った缶コーヒーの口を開ける。崖下には街の灯りが美しい夜景を形作っていたが、太陽の光がなかったとしても、十年前の地図に描かれていた大陸の形から、大きく変化してしまった海岸線がよく見えた。

大惨事。それは五年前、世界中で発生した大規模の自然災害だ。その災害は、千年以上も他国からの侵略を許さず、その間同一家系の皇族を絶やすこともなかった我が国に、歴史上もっとも深刻なダメージを与えた。しかし、それでも我が国は際どいところで、単一主権国家としての体裁は保っている。世界には隣国と合併せざるを得ない状況下にあっても、民族同士の血の流し合いを避けられない国もある。国家同士の緩やかな共同体から、強固な結びつきの連邦制に切り替えて、復興の道を歩んでいる国々もある。佐々木はそんな大惨事で変わってしまった大地を、そしてそんな災害をも逞しく生き抜いた人間達が灯す、生活と文明の灯りに彩られた夜景を見下ろしていた。俺も車を降りて少し離れた場所に立ち、そんな彼の感情をシミュレートしてみた。そしてまもなく佐々木が考えているであろう人物、存在に辿りつく。

「あいつにプロポーズする場所としてここなら相応しいとキープしていた場所だ」

「なるほど相棒。確かにここは雰囲気が良い。跪いて求婚するには、膝を損傷しそうだが」

佐々木はふん、と鼻を鳴らし微笑む。

「それは、違う文化圏の話だな」

「そうか。それは失敬した」

「結局さ、酒飲んで道端で吐いてる時に背中をさすってくれてる時にね、感極まって『結婚してくれ』って言ったんだ」

「それは滑稽だ。しかし、相棒。その方が第三者的に見て、好感を抱けるシーンではあるな」

「そうかな？」

佐々木は遠く、遠くで浮かび上がる灯火を見ている。きっと漁船のものだろう。大惨事で世界中の人間が、等しく何かを失い、そして二種類の悲しみを背負うことになった。

一つは、大切なものが永遠に帰ってこない悲しみ。もう一つは、大切なものが帰ってくることを願い続ける、待ち人の悲しみ。

大惨事を生き残った者達は、生死を確認できない愛する者を探すことに躍起になった。ある意味で運の良い者は、愛する者の亡骸を見つけ、待ち人の悲しみを終わらせることができた。しかし、大半の者は亡骸も発見できず、その不幸に楔を打つことも許されなかった。そして、時折耳に入る、ある者が愛する者と生きて再会できたという知らせが、呪いのように明日もあの人を探そうという希望を生み出した。身も心もぼろぼろになるまで瓦礫をどけ、掲示板に写真を貼り、夜は酒と共に互いを慰めあう日々が、いつ終わるかもわからないまま続いた。

しかし、いつしかそんな生活に疲れ果てた人々が現れ始める。一人、また一人、と、想い人を探すことを止め、元いた場所に帰り、ただ静かに帰りを待とう、そう悲しみを心の奥にしまい込み、新しい生活を始める者が増えていった。この国ではそんな者達を「待ち人」と呼んだ。政府も待ち人を支援する施策を数々打ち出し、住宅の修繕費や購入費用援助、再就職支援、そして俗に待ち人世帯と呼ばれるようになる孤児と里親の引き合わせなどが、国のバックアップの元行われていったのだった。三国家もそんな者たちの内の一世帯だ。

「もう息子は六歳になるよ」

佐々木はガードレールに腰掛けながら言った。

「妻はまだ立ってないあいつを必死に抱きかかえながら、川に流されて行った」

佐々木はその日のことを思い描いているのか。

「あの日、丸一日は地震と火事が酷くてシェルターから出ることすらできなかった。電話も繋がらなかったし、ネットワークへのアクセス手段もなかった。左手を骨折してね。応急手当をしてもらったけど、痛み止めはもっと酷い怪我をした人に譲ってあげたから、左手の痛みと妻と息子のことが気がかりで、一睡もできなかった。次の日も、救助が待てども待てどもやってこないことで、災害の深刻さを悟った。痛みは大きかったけど、動けないほどじゃなかったから、シェルターで助けを待つんじゃなくて、外に助けを呼びに行くグループの方に参加した。変わり果てた街に啞然もしたけど、俺は、妻と息子が流れていった方角に歩き始めた。途中で瓦礫の生き埋めになった人を助けている人達を何人も見かけたが、申し訳ないと思いつつ、妻と息子を探し続けた。しかし、どの避難所へ行っても、誰に話しかけても、消息は分からなかった。やがて俺の両親の遺体が見つかって、合同葬儀に参加して、仮設の住宅も割り当てられて、街はどんどん復興して…。妻の両親は健在だったから、情報を交換しながら妻と息子を探し続けたけど…。ちょうど丸三年が経過した日に、俺と妻の両親、三人揃って役所で待ち人認定を受ける手続きを取ったんだ。それ以来、妻の両親とは年に一度か二度、メールでしか連絡を取っていない」

佐々木は空になったコーヒーの缶をゴミ箱に投げ捨てる。ナイスシュート。一回で、がらんがらんと大きな音を立ててゴミ箱に収まる。辺りは静かなので、音がとりわけよく響く。

「相棒は、なぜ独立して探偵に？ 待ち人認定を受けた人間には、再就職支援も優先的に行われたと記憶しているが」

佐々木は、かつては公害の影響で失われていたという、満天の星空を仰いだ。

「俺はここで待つことにした」

そう言ったすぐに、彼は頭を横に振る。

「いや、待つことしかできないんだ。細くてもろい糸を手繰り寄せては、その結果に絶望することに耐えられなくなった。だから、俺はもう、どこにもいけない。けど、そんな自分でも、他の誰かのために、何かを探してあげるだけならばできそう。...あの日以来、この国には、この世界には、探し物で溢れるようになった。だから、せめて誰かのために...、俺のように自分の探し物を自分自身では探すことのできない人のために、代わりに探すことを続けよう、そう思ったんだよ」

彼は、彼なりにそうやって生きる理由を見つけたということなんだろうか。俺は考えた。俺には何かをする理由は必要ない。主に命じられれば、目的を達するまでその行動を続けるだけだ。しかし、人間はそうはいかない。俺はふと、疑問に思ったことを質問した。

「相棒。相棒の探し物を、代わりに探してくれる人はいないのかい？」

佐々木は、その問いには何も答えてくれなかった。

佐々木は、自宅へ戻ると、酒を飲みに行くと言い残し外出してしまった。俺の自律行動設定は「中」に設定していった。主との別行動が前提で、これといった指示もない時には、電源を切っておくか、自律行動を設定しておくかになる。自律行動の設定にも細かい定義は色々あるのだが、この場合に簡単に説明すると、「家の中で大人しく待っている」だ。

俺はまず三〇分程かけて部屋の中を掃除した後、仕事部屋に置かれているイス型の専用充電スタンドに腰掛けた。そして頭の中の整理を始めた。これは人間で言うところの睡眠に似ている。俺達メカは体を休める意味での睡眠は必要ないが、時々こうしてデータの整理する必要がある。人間の睡眠と違い、一日に一回というように原則的に決められた周期があるわけではないが、あまり間隔が空き過ぎてしまうと、思考のスピードが落ちたり不具合が起きやすくなってしまっているので、作業の合間にささっと済ませてしまうメカがほとんどだろう。

俺は、普段は統一している「小さな俺」を、本来の大きさに戻して開放していく。「小さな俺達」は、分裂して手分けをして情報を整理したり、統合したり、あるいは不要と思われるものを封印していく。「中央の俺」は、処理能力の八割ほどを使って、小さな俺達に同時且つ並列に指示を出し、また一方で新たな形に整えられた情報を読み直したりした。

そうやって、今日も俺は更新されていく。俺に蓄積された情報を整理し、システムを最適化していく作業は、人間がよく言う「立ち止まって考える」や、あるいは「気持ちの整理」に近い行為なのだろう。

...最適化。...人間は何に向かって最適化されるのか。俺自身は、とてもはっきりしている。佐々木の仕事に、より役に立つ存在になること。それ以外に目的はない。人間はどうなんだろう。大概の人間も、おそらく目的を持っている。俺達メカのように他人に与えられるわけではなく、自ら目的を決めて生きている。また一方で、特に目的など定めなくても、それなりにうまくやる人間もいるだろう。そのどちらも人間。俺はどうなんだろう。佐々木にとって完全に不要な存在になり、本当に何も目的が与えられなかったら、どうなるんだろう。考えるだけ無駄ではある。俺達ロボットは、そもそも人間の夢や欲求が生み出した存在だ。果たすべき目的が無いわけが無いのだ。しかし人間が人間を生み出す時は、ここまで透明な意志が存在しない場合も、多々あるのではないか。少なくとも意識上の「自分」には。であるにも関わらず、人間は人間を愛する。そして新しい命を創り出し、当然のように生み出した我が子を愛する。そして子から大人に成長し、血の繋がらない誰かを愛していくことができる。そのことを俺は、良いとも悪いとも評価できない。人間とはそういうものだ、という認識、あるいは定義が更新されていくに過ぎない。だから、そんな俺がどれだけ最適化を重ねても、人間が本当に探したいものを見つけることは、できないのではないか。人間が探したいものは人間にしか探せない。そういう気がする。

俺の思考はどんどん加速していく。作業を終えた小さな俺達が合流するにつれ、その速度は速まっていく。ばらばらに乱反射をしていた情報の粒子が、一定方向に流れ始める。やがて情報が大河のようにゆっくりと一定方向の流れに統一されていき、今日の更新作業を終える。時間にして約三〇分の出来事だった。

翌朝の朝食メニューは、白米に雑穀を混ぜた飯に、しじみの味噌汁、黒糖を使った煮物だ。酒を飲んだ次の日に良さそうなメニューにしたつもりだ。炊事、洗濯、掃除、家事全般をこなす機能は特に難しい設定や有償オプションをつけなくても標準で実装されている。

佐々木が朝食をとったり、シャワーを浴びたりする間に、三国家周辺の猫達とゴンゾの行動範囲を比較、検証する作業を行った。

ゴンゾと他の猫達の行動範囲を検証してみた結論は、ゴンゾが海静女学院の倉庫まで移動したのは明らかに不自然だ、というものだった。その日ゴンゾは他の猫の平均的な移動距離を遥かに上回る距離を移動していた。この事実は、どんな意味を持つのだろうか。

「ところで、マルチセンサーからの情報は更新されていたのかい？」

佐々木は、移動中の車内で、そう質問してきた。昨日、役所のデータベースが更新されていれば、倉庫に到着した後のゴンゾの動きがわかるかもしれないと話していた件だ。

「いいや。遺憾ながら役所のデータベースに大きな変更はなかった。現地で調べるしかないのである」

「了解」と佐々木は答え、後はずっと黙って運転をしていた。朝は大体無口だ。

倉庫に到着すると、念のため前回とは違った場所に車を停める。車上荒らし紛いな出来事に見舞われた後だから、ささやかな警戒行動だ。

「相棒、それにしても昨日の出来事はどう解釈すべきだろう？ 探偵をやってるとあんなことは日常茶飯事なんだろうか」

俺は昨日三国園子らと別れた後に、何者かがこの車の記憶領域に不正アクセスしようとしていたことを思い出しながら聞いてみる。佐々木は「まさか」と両手をオーバーに広げて答えた。

「そんなわけあるか。今までこういうことがなかったわけじゃないが、それは探偵だからって理由じゃないよ。たまたまさ」

「同意。探偵だからと都度狙われていたのでは、その時点で調査の見通しは暗いな」

「だよな」

と佐々木は笑う。俺もそれに合わせて、いかにも機械の合成音という風情の笑い声を鳴らしてみた。佐々木の笑顔は制止する。

「なんだ、そりゃ」

「うん？ これは笑い声だ」

「...冗談を言うようになったか」

「ご機嫌ではないかな？」

佐々木は何も答えない。そうか。日頃の佐々木の冗談を解析して、新たに加えてみた会話パターンだったが不評なようだ。俺は佐々木の機嫌が悪くなる前に黙ることにした。

それにしても澄んだ空気だ。朝の森林は、ロボットにすら効用がありそうだ。佐々木の体調がみるみる良くなっていく様子が、人体観察用の簡易モニター越しでもよくわかる。大惨事で街が破壊されてから、皮肉も自然環境は過去百年で最も良い状態に近いところまで回復している。復興の目処の立たない人工物が朽ち果てていく代わりに、新たな生命の息吹が蘇っているのだ。皮肉なものだ。

一〇分も歩かない内に海静女学院の倉庫に到着した。

「さてと、ロボット、内部の熱源チェックを頼む」

佐々木の指示で俺は昨日と同じ要領で内部に人や動物がいないか調べる。

ついでに昨日こちらを観察していた人工知能付きのセンサーマシーンがないかも調べておく。クリア。中には人もメカも、残念ながら猫もない。

「そうか。では無理なく内部に侵入できる場所があるか調べてみよう」

「やはり中を調べるんだな？」

「ああ。どうしても入れなかったら、外を調べて帰るさ」

帰る、とは言っても、ここで手がかりを見つけなければ、調査は振り出しに戻る。それは避けたいところだった。

誰かに咎められる心配がなかったので、壁、天井、窓、と入念に見て回ることができた。辺りでは、野鳥の鳴き声と、時折風で葉が擦れ合う音しかしない。静かなもんだった。

「穴だ」

佐々木が指差す方を見ると、確かに地面すれすれの所に、壁に何かの拍子で空いたと思しき小さな穴が空いていた。俺達を通るには小さすぎるが、猫一匹だったら通れるだろう。壁が破れた断面を調べるとまだそれほど錆付いていない。佐々木もそれに気が付いた。

「なあロボット、これ、何を使って切り取られたんだと思う？」

「...水だな。高圧縮の水で裁断している」

断面をスキャンすれば、それしか答えが出ないほど典型的な特徴が見受けられた。

「隠密性の高いカッターか」

「緊急用のカッターとしては、優秀な場面もある。かなり硬いものでも切れるし、摩擦熱が発生しないからガスが充満しているような場所でも爆発事故を恐れずに使える」

「そんなもので壁を切り取って、内部に侵入するほどの場所なのかね？　ここは。ただの女学生達のサボリ部屋だぜ」

佐々木はおどけている振りをするが、目が全く笑っていない。そして、その表情はかがんで穴の先を見ると、もっと強張った。佐々木は立ち上がり俺に指示を出す。

「この場所からできる範囲でいい。穴の先にある物を調べてみてくれ」

「了解だ、相棒」

俺も地面に突っ伏し、解析用のカメラモードに切り替えようと思った矢先、それが目に入った。

一瞬、それは小動物の死骸に見えた。そして形から、それが猫であることを理解する。そして骨までむき出しにされていることに、人間であれば嫌悪感を覚えるだろうと想像し、さらにその骨が骨ではなく金属のフレームであるに気付く。それは、猫を模したメカの残骸だった。

「相棒...、これは...」

俺は咄嗟に言葉が見つからない。佐々木が代わりに話し出す。

「昨日から俺達を観察していた人口知能付きセンサーだな。きっと。俺達の車にちょっかい出したのもこいつだろう。そして、何より人間の直感を元に言わせてもらえば...」

佐々木は、ため息をつく。

「こいつがゴンゾだ」

第一話「ロボットと探偵」完→第二話「ラボと親友」へ続く